

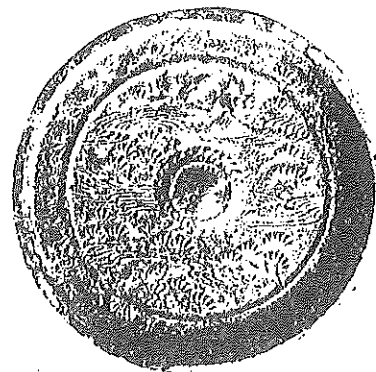
逗子市 郷土資料館 だより

平成5年12月1日 発行

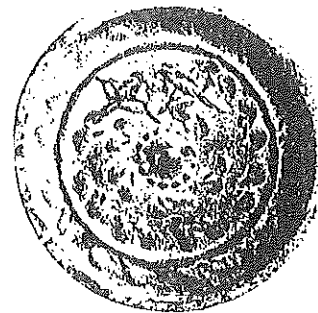
NO. 7

今回の郷土資料館だよりNO. 7は、小坪の^{おつか}大塚から出土した和鏡と^{すり}硯についてです。小坪大塚は、^{ひろおやま}披露山から伊勢山へ通じる道のかたわらにありました。現在では大塚は宅地開発の進行により、塚は崩されてしまい、どのあたりにあったかささえさだかではありません。今回は、この大塚から明治時代に出土し、郷土資料館に展示されている2面の和鏡と2面の硯の説明をいたします。

小坪大塚は、小坪4丁目のTBS団地の、伊勢山大神宮に近い岡の上にあたりにあったと推定されます。塚は宅造開発により崩されてしまい、詳細な調査は実施されていませんので、どんな物が埋蔵されていたか、塚はどんな形をしていたかなどは、残念ながら何もわかっていません。この大塚から明治20年(1887)3月に古い和鏡が2面と硯が2面が掘り出されました。和鏡は、^{あかしなおたが}赤屋直忠先生によると、「経巻を納めた^{とこなめ}常滑焼などの壺の^{ふた}蓋として、和鏡が用いられ、または壺に添えて埋められていることが多い。写経に使われた硯が、いっしょに塚に埋納されている場合もある」と言っておられました。この話からすると、小坪大塚は仏教の経典を供養して、地中に埋め塚を築いて祀った経塚であったと思われます。この2面の鏡は、経塚に埋納された鏡であったということが出来ます。このほか、経塚には石塔^{しゃ}を建てたり、経文を墨書した磔、すなわち写^{きょうせき}経石などがいっしょに埋められています。大塚からは写経石も出土しています。このことから小坪大塚は、経塚であったということが出来ます。経塚を造るということは、有力武士や各地の長者が、長寿が保てたり、死後に極楽浄土に行けるという功德を求めて行われたものです。逗子においても、有力者が功德を求めて経塚を築き、鏡や硯を埋納したのではないかと思われます。



1. 小松流水文双雀鏡

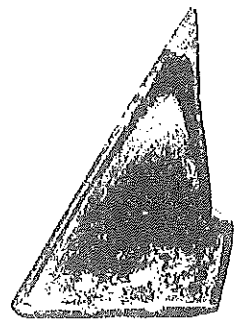


2. 小松散文双雀鏡

出土した和鏡と硯についてですが、鏡は前述の通り2面あります。写真1の大きい方の鏡は「小松流水文双雀鏡」と名づけられ、厚さ7.5mm、直径68mmの丸い鏡で、わずかにそりがみられ、中心に菊座紐きくざぬいがあって、模様は葉に流水文、上部中央に2羽の雀が向き合っている図が描かれています。鏡の造られた時代は、鎌倉時代の後期であろうと思われます。写真2の小さい方も丸形の鏡で、「小松散文双雀鏡」と呼ばれ、厚さが4.5mm、直径58mmで、いちめん松葉を散らした模様が描かれ、上部中央に2羽の雀が向かい合っています。この鏡も鎌倉時代後期の物です。いっしょに出土した硯は2面あり、写真3の硯は黒灰色で、大きさは6.25cm×11cmの長方形をしており、厚さは1.2cmです。断面は、上面より下面が小さくなり、池部分も陸部分も、内面に斜めに切ってあります。表面は、四隅に細い沈線で周縁幅と同じほどの輪郭をめぐらし、内側に数本の波状文を刻んで装飾としています。写真4の硯は、淡い小豆色で、形は不等辺三角形にちかく、大きさは左側10cm、右側8cm、下側約6cmで、右辺に一部突起部があります。厚さは約1cmで断面は下に狭くなっていきます。上面には周縁をめぐらし、とがった部分に小さな池を作り、側壁は内面に斜めに切ってあります。2つの硯の作られた時代は、鎌倉市内で発見された鎌倉時代の硯と同じ様な手法で作られていることから、出土した2面の鏡と同じく鎌倉時代の硯であると思われます。これらの鏡と硯は、昭和49年(1974)12月18日に市の重要文化財に指定されました。

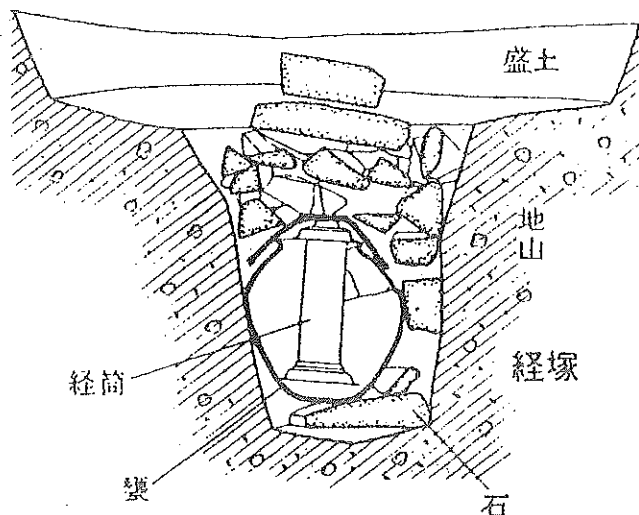


3. 硯



4. 硯

(文化財専門員 宮坂淳一)



1993年(平成5年)12月1日 発行
 逗子市郷土資料館だより NO. 7
 編集発行者 逗子市郷土資料館
 逗子市磯山8丁目2275番
 電話 0468-73-1741
 © 逗子市教育委員会 1993